洋０９－１０６

「トランスフォーマー／リベンジ」 ✿✿✿

２００９（平成２１）年７月５日鑑賞＜ＴＯＨＯシネマズ梅田＞

監督・製作総指揮：マイケル・ベイ
製作総指揮：:スティーヴン・スピルバーグ
サム・ウィトウィッキー（大学生）／シャイア・ラブーフ
ミカエラ・ベインズ（サムの恋人）／ミーガン・フォックス
ウィリアム・レノックス（米国陸軍少佐）／ジョシュ・デュアメル
ロバート・エップス（米国空軍曹長）／タイリース・ギブソン
シーモア・シモンズ（元セクター７のエージェント）／ジョン・タトゥーロ
ロン・ウィトウィッキー（サムの父親）／ケヴィン・ダン
ジュディ・ウィトウィッキー（サムの母親）／ジュリー・ホワイト
セオドア・ギャロウェイ（国家安全保障問題担当大統領補佐官）／ジョン・ベンジャミン・ヒッキー
レオ・スピッツ（サムのルームメイト）／ラモン・ロドリゲス
モーシャワー将軍（ＮＥＳＴ司令官）／グレン・モーシャワー
グラハム（ＳＡＳ（陸軍特殊空挺部隊）エージェント）／マシュー・マースデン
２００９年・アメリカ映画・１５０分
配給／パラマウント映画

＜１．５億ドルから３億ドルへ、１２体から４０体以上へ＞

日本では興行収入１０億円をあげれば大ヒット。単館上映作品では１億円が１つのメド（？）だが、本作は製作費だけで、第１作の１．５億ドルから倍増の３億ドルへ。ということは、３００億円。何とケタ違い！また、トランスフォーム（変身）するトランスフォーマー（金属生命体）の数も、前作の１２体から本作は４０体以上とのことだ。

前作はオートボットとの戦いの末にディセプティコンが敗北したらしいが、本作ではディセプティコンが新たな侵略計画のもと、巨大なトランスフォーマー“デヴァステーター”やメガトロン以上に凶悪な“フォールン”が登場！さらに、前作の「セクター７」は解体され、新たに設立された「ＮＥＳＴ」がオートボットと協力してディセプティコンの掃討に当たっているらしい。

こんな展開を聞くとトランスフォーマーマニアにはたまらない風景だろうが、そもそもトランスフォーマーに何の興味もない私には話がややこしいだけ。そのうえ、動体視力の衰えを自覚している私には、オートボットとディセプティコンに分かれて戦っている金属生命体の顔つきや身体つきの特徴がよく掴めないから、何のことかサッパリ・・・。

＜主役は？その他の人間は？＞

前作の主役で一気にブレイクし、その後『インディ・ジョーンズ／クリスタル・スカルの王国』（０８年）、『イーグル・アイ』（０８年）などスピルバーグ作品への出演が相次いでいるのがサム・ウィトウィッキー役のシャイア・ラブーフ。サムは今入学が決まったプリンストン大学での学生生活を楽しみたいと願っているが、さて？同じく前作でブレイクし、「世界で最もセクシーな女優」に選ばれたミーガン・フォックスが演ずるのが、サムのガールフレンド、ミカエラ・ベインズ。

映画は冒頭、サムとミカエラとの別れ、またサムを見送る父親ロン（ケヴィン・ダン）と母親ジュディ（ジュリー・ホワイト）との別れをかなり大げさなタッチ（？）で描くが、本作において必要最小限押えておかなければならない人間ドラマはその程度？ちなみに、この導入部でサムのボディガードのトランスフォーマーであるバンブルビーとの別れも描かれるが、そもそも私にはこのバンブルビーの存在も役割も能力もよくわからないから、ハッキリ言って私には本作を評論する資格なし？

とはいえ、映画後半にはパソコンおたくのサムのルームメイトであるレオ・スピッツ（ラモン・ロドリゲス）やセクター７のエージェントだったシーモア・シモンズ（ジョン・タトゥーロ）がサム、ミカエラと行動を共にしてそれなりの役割を果たすから、トランスフォーマーと主役の２人だけではなく、これらの人間もお忘れなく。

＜戦いの舞台は、上海、ロンドン、パリ、エジプトなどへ＞

本作の製作費が倍増した理由の１つは戦いの舞台が上海、ロンドン、パリ、エジプトなど世界的規模に広がったこと。とりわけクライマックスにおけるエジプトのピラミッドを中心とした壮絶な戦いが本作最大の見モノ。監督と製作総指揮をしたマイケル・ベイはパンフレットの中で「僕には、この地球上の誰よりもアクションシーンを速く撮れる自信がある」と豪語しているが、はじめて撮影が許可されたというピラミッドの上で彼を中心とするスタッフはいかなる撮影を？三角形の巨大なピラミッドが巨大なトランスフォーマーたちによって次々と壊されていくが、もちろんこれはさまざまな撮影上のテクニックを使ったもの。

この延々と続くクライマックスシーンの主役は、トランスフォーマーではなくもちろんサムとミカエラだが、ここでのサムとミカエラの役割はただ走ること。もちろん走らなければならないのは、迫ってくるディセプティコンから逃げるという消極的な意味もあるが、積極的な意味はディセプティコンとの戦いで死亡したあるオートボットをある方法によって復活させること。それを可能にする男はサム以外にいないから、地球を守る任務は結局サム１人に託されたわけだ。そんな練りに練られた脚本をしっかり楽しみたいが、私には正直荷が重かった。

＜１度観れば十分・・・＞

パンフレットにあるインタビューで、マイケル・ベイ監督は「今回、いちばん映像化に苦心したトランスフォーマーを教えてください」との質問に対して「デバステーターだね。３０年もの歴史があるモデルで、他のトランスフォーマーに比べて１０倍の複雑さだ。コンピュータの天才が必死の思いで映像化してくれた。パーツだけで１０万個も必要なんだよ！」と答えている。しかし、本作をはじめて観た私には、デバステーターとは多分あのトランスフォーマーだろうと思う程度の認識力しかない。そんな金属生命体がトランスフォームする姿を超高速フィルムで撮るのだから、何度もそんなシーンを観ていると頭の中（目）がパニック状態に・・・。

こんな金属生命体に人間が襲われたら人類が滅亡してしまうこと確実だが、人間に味方するトランスフォーマーがいるところが本作のミソ？かつてゴジラＶＳガメラをはじめとする（？）怪獣対決は東宝の特殊撮影の独壇場だったが、今は金属生命体同士の対決の特殊撮影がハリウッドやマイケル・ベイ監督に奪われただけ？いずれにしても、私にはこんな映画は１度観れば十分・・・。

２００９（平成２１）年７月７日記